

Jack London の “The Red One” 覚え書き

岡 崎 清

はじめに

Jack Londonの短編小説“The Red One”は1916年5月ホノルルで書き上げられ、ロンドンの死後、*Cosmopolitan* 誌1918年10月号に“The Message”として掲載された。このとき同時に他の作品を含めたアンソロジー *The Red One* もマクミラン社から出版され、これには表題作“The Red One”として収められている。1916年11月に他界したロンドンの最晩年の作品群のひとつである“The Red One”は、これまでさほど批評の関心が向けられてこなかった。端的に言ってこの作品が「1972年までリプリントされていなかった」事情によるものだとLawrence I. Berkoveは言う。⁽¹⁾しかし、ロンドンの文学は長編より短編に芸術的価値があると評価したJames I. McClintockすら *White Logic* (1975)のなかで作品としての“The Red One”には言及していない。⁽²⁾ McClintockは1916年をロンドン文学の「再生」と位置づけ、ユング心理学に傾倒していったロンドンとその投影としての作品群を高く評価しながら“The Red One”への言及を回避しているのはなぜなのだろうか。“The Red One”が長い間絶版であったという問題は、すでにEarle Laborを中心とした編者がスタンフォード大学出版局から *The Complete Short Stories of Jack London* (1993)を出版したことにより、絶版が批評の欠如の理由とはならない。⁽³⁾ 1990年代に入ってからロンドン関連の研究書が陸続と毎年必ず出版されているにもかかわらず、やはり“The Red One”を本格的に論じたものは数少ない。このことはロンドンの文学評価をどこに同定するかという根本的な批評の問題を含んでもいよう。

数少ない“The Red One”論考にはユング心理学の応用批評や原型・神話批評が幅をきかせている。物語の主人公である文明世界に生きる人間 Bassett が自己の無意識と対面し、登場人物の Balatta や Ngurn そして The Red One を通して、自己の全体化をはかろうとした「真実探求」の物語と解釈する論調に集約されている。

これまで単行本の研究書に単独の論として掲載されている論文はわずかふたつにすぎない。ひとつはLeon CassutoとJeanne Cambell Reesmanの編による *Rereading Jack London* (1996)のなかにある。⁽⁴⁾ 本書は13の論文を集め、近年のロンドン批評では最良の研究書の部類に入ると

思われる。論者の間で共通した視点はなく、様々な角度からロンドン批評を行っているという点においても興味深い。個々の論文においてはともかくも、しばしば単著にみられるような論理を貫徹させるために論理と矛盾した作品箇所を枝葉末節として切り捨てるということがない。ある意味では1冊の書物のなかで論者同士のたたかいがみられる書物でもある。その *Rereading Jack London* には先述した Berkov が“The Myth of Hope in Jack London’s ‘The Red One’” という題目で論文を寄せている。Berkov の解釈によれば、ロンドンは「知性と敏感な想像力の統合」が「進化の道に沿いながら種を前進させるために必要とされる」と考えた。しかし、ロンドンは1916年時点の世界人類がそこまで到達していないと考え、「人間の知性の肥大が他の人間の特質と分離されている」現状を「恐れた」ために“The Red One”を書いたのだ、と Berkov は結論づける。これはユング心理学の応用批評によらない論として目立っている。いっぽう Berkov の解釈とは正反対の解釈が *Jack London Newsletter* vol.10, No.3(1978) に収められた Billy G. Collins の“Jack London’s ‘The Red One’: Journey to a Lost Heart”にみられる。⁽⁵⁾ Collins はこの物語を「絶望の叫び」ととらえ、「進化のもっとも高い段階に進んだ人間の代表者としてのバセットは、殺人者であることを証明し」てしまい、「野蛮への退化」を示してしまった物語と解釈する。

もうひとつの単行本掲載論文は Susan M. Nuernberg の編集した *The Critical Response to Jack London* (1995) に収められた James Kirsh の“Jack London’s Quest: ‘The Red One’” 論である。⁽⁶⁾ Kirsh は文学研究者ではなく心理学者であり、上掲論文の初出は、*Psychological Perspectives*, 11,2(1980) という心理学研究雑誌に掲載されたものであった。

Kirsh はユング心理学に従って Bassett の行動を自己実現の物語と基本的に解釈するものの、「この物語はジャック・ロンドンの個人的な心理を描いているのではなく、アメリカ人の心理、さらには西洋人全体の心理を描いた正確な見取り図だ」と結論づけた。ロンドンは「人間の狭い意識の領域を超えて生成している知の世界があることに気づ」き、Bassett にその世界をみさせる特権を与えたのだと Kirsh は指摘する。ここで、「人間の狭い意識の領域」とは西洋近代文明を指し、「それを超えて生成している知の世界」とはガダルカナル島での赤い窪み (The Red One) とそれを中心に生きているシャーマンの存在の Ngrun の世界である。結末の Kirsh の解釈は Bassett が「赤い窪み」の正体をみきわめたことで自己実現を達成させたととらえている。

Bassett の自己実現は正当か

ユング心理学の応用批評に依拠した“The Red One”論に欠如しているものは、主人公 Bassett の自己実現がどのような過程を踏まえてなされたかという視点がないことだ。単純化して意識界＝西洋文明＝白人、無意識界＝非西洋世界＝非白人という二項対立の図式に従えば、Bassett は自己の内部に無意識界を取り入れることによって自己実現を果たしたということになる。で

はその過程はいかなるものか。物語はイギリスの科学者で銃を持った Bassett が巨大な蝶を採集すべく、日本人と思われる Sagawa を連れてガダルカナル島を訪れたことから始まる。島の人喰い族や首切り族の攻撃にあつて Sagawa は殺され、Bassett は生き残る。銃が彼を唯一守る道具であった。Bassett はマラリアなどの熱病にうなされ正気がほとんど得られない状態であり、倒れていたところを島の娘 Balatta に助けられる。Balatta は Bassett に恋をする。Bassett は「醜い」彼女に我慢をしながら、彼女を騙して自分も恋をしているふりをする。島に着いたときから聞こえる不思議な音の正体を突き止めるために彼女にその場所を案内してもらうためであった。Balatta の部族にはシャーマンらしき男 Ngrun が沢山のはねられた首を家の天井からつるし、いぶして祈祷していた。Ngrun は Bassett の首を欲しいと言ひだし、Bassett は不思議な音の発生する場所へ案内してくれたら、首をやってもいいと言う。この時点では Bassett は銃を武器にいつでも Ngrun を殺せると企んでおり、彼の本意ではない。Ngrun が案内を断るのを待ったうえで、今度は Balatta に結婚の約束をするといつてそそのかし、音の発生源に来てみる。そこには大きな赤い半球の地球上ではみたこともない金属でできた大きな窪みがあり、その中には部族が人間の生け贄をささげたあとのしゃれこうべが散乱していた。音のでるこの赤い窪みについて Bassett はついに正体を突き止めたと思ひ、満足して部落に戻る。Ngrun に再会すると今度は本気で首をはねてもいいと言ひだし、実際はねられて物語は幕を閉じる。

ロンドンの人種観については研究者の間で評価がわかれているところだが、⁽⁷⁾ 最晩年の作品 “The Red One” を読む限り白人主義者であったと思われる。しかし、注意すべき点はロンドンが読者の受けをねらつて意図的に白人主義者を装つて書いたものかという点にある。さらに Bassett と作者ロンドンの関係をどうみるかにもよるだろう。さて、島の娘 Balatta の表情は以下の如く描かれている点に注目すべきである。

[H]er sex was advertised by the one article of finery with which she was adorned, namely a pig's tail, thrust through a hole in her left ear-lobe. So lately had the tail been severed, that its raw end still oozed blood that dried upon her shoulder like so much candle-droppings.

And her face! A twisted and wizened complex of apish features, perforated by upturned, sky-open, Mongolian nostrils, by a mouth that sagged from a huge upper-lip and faded precipitately into a retreating chin, by peering querulous eyes that blinked as blink the eyes of denizens of Monkey-cages.)

Balatta には耳たぶに豚の尻尾で飾つたピアスをつけており、生きた豚から切つたばかりのために先から血が肩にしたたり落ちてゐるという。顔は猿顔で鼻の穴は空を向いており、上唇が厚くて引っ込んだ顎の上に覆い被さるかのようだ。まるで檻に入れられた猿のように目をぱちくりしている、などという表現はロンドンの表現技法からみてユーモアを示す箇所ととるむ

きもあろう。しかし、こうした箇所をユーモアと理解する批評家がいるとすれば、ロンドンの人種観を無視した、あるいはロンドンと同一化した人種観の持ち主であろう。この箇所は Bassett が「科学者の目」で Balatta を観察したとある。Bassett の観察に中立性が保たれていることを示唆するためだ。しかし、美醜の価値判断が文化によって異なることは自明である。この後 Bassett は Balatta を利用して不可思議な音の正体をつかもうと、行くことがタブーとされているその場所へでかけるのである。言うまでもなく Bassett は白人主義者であることがわかる。かりに Balatta を心の底から受け入れていたとしたら、Bassett の中に隠れていた「他者性」が顕在化し、ユング的な意味での自己の統合化が達成されたかもしれない。しかし、Bassett はあくまでも Balatta を利用し、「科学」のために音の正体を突き止め、突き止めた後においては、「赤い窪み」のメッセージを「たとえガダルカナル島の全住民を殺すことになったとしても」この世に伝えるべく「回復して」「文明世界」に戻ろう、と考えている。

The Red One の正体

Bassett が目にした不可思議な音とは赤い窪み(The Red One)から発せられていたことがわかる。科学者 Bassett の結論は、赤い窪みは「世界を結ぶメッセンジャー(the messenger between the worlds)」であるということだ。半球のように地面をえぐられた赤い窪みは、隕石の落下であると解釈することが十分可能だ。つまり、宇宙の他の世界から地球にむけてメッセージが届けられたのだ、と読むことである。じじつ Bassett は赤い窪みの発する音を「他の太陽系の惑星に住む超人の知性」を帯びていると感じとっている。“The Red One”が James Bankes の編集によって *The Science Fiction Stories of JACK LONDON* (1993) に収められたのもそうした読みのひとつだろう。⁽⁹⁾

この赤い窪みのメッセージは、「もしかしたらもう 1 万年も前からガダルカナル島のまんなかで人間が耳にするのを待っていたのかもしれない」ともある。ここでもガダルカナルの現地人は Bassett にとって人間ではないとみなされていることが暴露されている。極言すれば赤い窪みのメッセージは Bassett だけが受け取れるものであった。「他の惑星の自分と似たような仲間からのメッセージを最初に受け取ることができる」人物が Bassett であった。この表現は作者ロンドン特有の彼が好んだ超人主義からうまれたものであることは明らかであり、白人主義者のロンドンに加えて、ニーチェの超人主義をロンドンがどう理解していたかは別としても、超人主義者が重なり合って Bassett が存在する。

ところで「赤い窪み」の「メッセージ」とはいったい何であろうか。素朴な疑問が“The Red One”を読むすべての読者にまわりついて離れないと思われる。もとより“The Red One”は *Cosmopolitan* 誌に“The Message”として発表されている。結末で Ngrun に首を差し出してはねられる瞬間、Bassett の脳裏には「彼はメドゥーサの穏やかな顔をみつめた、真実を」とある。メッセージに映し出された真実の内実は読者には明かされぬままである。Banks は先述し

た *The Science Fiction Stories of JACK LONDON* の前書きのなかで次のように読者に問題を提起している。

“The Red One” represents London's last great effort, as he died six months to the day after finishing it. The scientist Bassett first hears and then gazes on the fantastic Red One, a star-born deity of Guadalcanal headhunters. Will the discovery lead to new life or to death?⁽¹⁰⁾

Banks は Bassett の赤い窪みの発見によって、それが彼を「新しい生活」へと導くものになるか、それとも「死」をもたらすのか読者に問いを投げかけている。おそらく“The Red One”の解釈が大きく正反対のふたつにわかれるであろうことを Banks は理解している。しかし Bassett が何を「赤い窪み」から理解したのか、Banks も何も示唆してはいない。

「赤い窪み」の別名はガダルカナル島の人びとによっていくつにも呼ばれていた。その中には「神の声」, 「星に生まれし者(The Star-Born)」などが含まれている。この物語において、近代文明の建設者として位置づけてよい「科学者」である Bassett が理性によってのみ合理的に判断される世界を代表していると読むことは容易である。いくばくかの恐怖、荘厳さ、宗教的雰囲気、交錯した音に代表される「赤い窪み」は非理性的なあるいは近代の知性ではとらえどころのないものの象徴として位置づけられることも同様に可能だ。ユング心理学を用いてこの物語を Bassett 個人が自ら理性と非理性を統合した人間に向かわせるための物語と読む批評は、Bassett が赤い窪みを認識し理解したことで Bassett の真の自己確立が達成されたと読み、結末を肯定的に解釈する道筋を設けている。ところがこの解釈を押し進めると結末で Bassett が自らの首を差し出すという行動がどのように彼の自己確立と結びつくのか、架橋すべきものがみつからないではないか。根本的には Bassett が非理性、他者性、あるいは近代文明では捉えることのできない別次元の世界の存在といったものを認識し、理解しているのか、それともその認識が新たな展望を20世紀の西洋にもたらすものなのか、という問題に行き着くであろう。

「赤い窪み」の別名が「星に生まれし者」であることに注意をむければ、ロンドンの短編“The Night-Born”(「夜に生まれし者」) がタイトルとしてよく似ている。“The Night-Born”は中年の独身男性が女性からの求婚を断った物語であり、その男はユングの言うアニマ(女性性)をうちに取り込むこと⁽¹¹⁾に失敗し、部分的な人間存在にしかなりえていないと Labor と Reesman が指摘している。) 物語の中心は求婚した女性の側の生涯が描かれている箇所にある。彼女は何気なく新聞の記事に Henry David Thoreau の文章を見つけ、自分が夜に生まれし者であると思うようになり、都会を抜け出してアラスカに出ていく。彼女が読んだ Thoreau は、インディアンを文明化しても駄目である、彼らは独自のやりかたで彼らの土着の神がみと自然を通して交流しているのだ、と説いていた。文明人が持っている「昼間に生まれし神がみ」はインディアンの「夜に生まれし神がみ」とは比較にならぬほど歴史が浅いのだとも。ここでも“The Red

One”同様、昼間＝理性＝文明、夜＝非理性＝反文明という二項対立の存在を物語のなかに図式的に読むことができる。昼間に生まれし神がみ、すなわち近代文明を支える理性、合理性、知の歴史の浅さは、しばしば人間の理性が人間を包む「薄いヴェニア板一枚」にすぎないというロンドンのよく使うレトリックに象徴的にあらわれる。しかし、相反する両者をどう統合していくのか。

“The Night-Born”では個人レベルにおいて自己の統合に失敗した物語(求婚を断った男)、もしくは夜に生まれし神がみを選択した女性の物語となり、二項対立が解消されてはいない。「赤い窪み」の世界はこの「夜に生まれし神がみ」の世界と近親性があることは確かである。決定的に異なる点は Bassett が「赤い窪み」を恐れ奉っている ガダルカナル島の住民を赤い窪みの発するメッセージを理解できない愚者としてとらえているが、“The Night-Born”の女性は Thoreau がどのような意味合いでネイティブ・アメリカンの世界を述べたかは別問題として、ネイティブ・アメリカンの世界や文化を尊敬もしくは共感している点にあらう。ちなみにこの女性も、物語のはじめで Bassett ひとりが助かったのと同様に、アラスカに行く船が難破した際、彼女だけが助かるのであった。

結末をめぐる諸問題

もともとロンドンがフィクションのなかで示す二項対立は解消されないまま、どちらかに傾いて終わるものがほとんどである。文明対自然というおきまりの主題をテーマにした *The Call of the Wild* では Buck の自然への回帰、また *White Fang* ではその逆を描き、短篇 “The South of the Slot” ではジキルとハイドばりにひとりの人の中にも資本家と労働者の対立を階級問題として生じさせ、結末では労働者階級の側に立たせることになる。こうしてみるとロンドンは一貫して文明対自然、知性対反知性、資本家対労働者、昼対夜、白人対非白人、シシイ対マッチョ、西洋対東洋などの二項対立を描き続けた作家であり、作風が文学芸術的であれ、三文小説のやっつけ仕事風であれ首尾一貫したテーマを持ち続けていたということができる。こうした二項対立は各作品で微妙に異なる結果を生みだしているものの、すなわち白人主義者の立場をとるときとそうでないときなどがあるが、実生活と関連づけるならば、ついに最晩年は自らの生の枯渇に恐れ、こうした二項対立をどちらか一方に肩入れをして解決をはかるのではなく、両者を統合する新たな世界観構築を目指す方向に向かったといえる。すなわち作品の主題が自らの生のとらえかたと結びつき、ユングへの傾倒により、ロンドン自身の生の悩み(肉体の破滅、物理的な死への直進)はその解決策(物理的な死の超越)をロンドンに与えてくれるかのようなようであった。

しかしロンドンがユングに傾倒していたからといって、またこの作品をユング的に解釈可能であるからといって、そのまま Bassett の自己実現もしくは新たな世界観の確立が彼を勝利に導いたとするには、Banks の問いにもみられるように簡単に言えない要素が多分にこの作品に

は含まれている。本論の前半で指摘したように、ユング的な自己実現にむけた Bassett の世界観構築が Balatta を犠牲にして、またガダルカナル島の原住民の存在を白人より一段低い位置におとしめて進められている点は抜きがたいロンドンの人種主義のあらわれとして、残滓といえるほどまで薄められてはいない。われわれが20世紀の後半にロンドンの作品を読むとき、20世紀初頭のアメリカ社会の人種意識を考慮にいれねばならないが、しかしそれがロンドンの人種意識の罪を免責する根拠にはならないだろう。小説家はリアルな現実の外に出てテキストの中で作品を構築しながら、テキストから現実世界を撃つ特権を持っていると思われるからだ。

むすびにかえて

Kirsh の批評は作品解釈を無時間的世界に回収する批評とは違い、西洋近代とアジアもしくは非西洋世界とのかかわりを物語が示唆していると読んだ。⁽¹²⁾ この根底にはロンドンが Bassett を相対的化し、Bassett はロンドンではないことを主張するものだ。あるいはロンドンが自己を相対化して書いたと言わなければならない。しかし Bassett がロンドンの精神世界を投影しロンドンの分身であることは、ロンドンの伝記その他を読めば明らかである。残念なことに Kirsh は西洋近代と非西洋とのかかわりについてその歴史的実態は何も述べていない。“The Red One”の物語で Bassett がそのかかわりを投影しているとすれば、西洋近代の傲慢さ、行き詰まりが Bassett の死を通して語られるていると解釈すべきだろう。しかしその行き詰まりが何によるものなのかを Bassett は感知していない。かりに感知していたとしても自らの首を差し出すことによって近代理性の敗北を認めたことになろう。いっぽう、Bassett が個体としての生死を超越した世界の存在を知ることによって、死を乗り越えようとしたという解釈をとれば Bassett の自己実現は死によって勝利したことになろう。しかし後者の読みでは、文学の力がみえてこない。死をもって自己主張をはかる文学には現世に対するそれなりの抗議がふくまれているはずだ。Bassett は自己の無力や限界に気づいたからこそ、なすすべもなく首を Ngrun に捧げるほかなかった。

もしロンドンの後期の作品とりわけ一連の短編群が21世紀に向かおうとするこの時代にいまも何かしらの意義を読者に与えているとするならば、近代そのもの、知性そのものの陥穽をロンドンが示唆している点にあるとしたい。それはロンドンの作品の陥穽でもあるのだが、この点は別稿で論じたい。この点を踏まえて言えばロンドンの作品はモダンになりうる。

注

- (1) Lawrence I. Berkove, “The Myth of Hope in Jack London's ‘The Red One’” in Leon Cassuto and Jeanne Cambell Reesman ed., *Rereading Jack London* (CA: Stanford UP, 1996), pp.204–215.
- (2) James I. McClintock, *The White Logic: Jack London's Short Stories* (MI: Wolf House Books, 1975).
- (3) Earle Labor, Robert C. Leitz, III, and I. Miro Shepard ed., *The Complete Short Stories of Jack London*. 3 vols. (CA: Stanford UP, 1993).
- (4) 注(1)を参照。

- (5) London 研究の雑誌で Southern Illinois 大学の Hensley Woodbridge が編集長をつとめていた。
- (6) James Kirsh, "Jack London's Quest: 'The Red One'" in Susan M. Nuernberg ed., *The Critical Response to Jack London* (Green Wood Press, 1995) pp. 201-216.
- (7) Sonoma 大学をサイトにもつインターネット上の Jack London ディスカッションでは、ロンドンの人種主義について活発な議論が展開されている。ロンドンが racist ではなく racialist であったと Andrew Furer などの弁護派も健在であるが、本論はそれと反対の立場にたつ。サイトへの入口は<http://sunsite.berkeley.edu/London> を参照。
- (8) Jack London, "The Red One" in James Banks ed., *The Science Fiction Stories of Jack London* (N.Y.: Citadel Press, 1993) p. 196.
- (9) 注(8)を参照。
- (10) James Banks, "Introduction" in *The Science Fiction Stories of Jack London*. p. 4.
- (11) Earle Labor and Jeanne Campbell Reesman. *Jack London*. Rev. ed. (N.Y.: Twayne, 1994).
- (12) 注(6)を参照。

(おかざき きよし 本学人文学部助教授 アメリカ文学専攻)